

グローバリゼーション

グローバリゼーションとかいうものが押し寄せている。冷戦終結・東側の崩壊を経て、資本・人・諸情報の流通が促進され、国境という障壁が良くも悪しくも低くなりつつある。同じ製品を生産しているのに、日本でなら年収3万ドル、××国なら年収365ドル、というような不平等はもはや許されない。道義的に許されないんじゃないくて経済原則的に許されない。世界の10億の民は日収1ドル以下で暮らしているのであるから、その10億の民が提供可能であるものはそのような価格帯に至るまで価格破壊が続く。デフレであってデフレでない面妖な側面、南北問題の南からの逆襲である。

科学的成果(製品)と称するものは、定義によって最初からグローバル(どころかユニバーサル)であるはずなので、グローバリゼーションなんていまさら驚くこと無いじゃん、とする向きもある。確かに科学的成果は普遍性をもっているものでなければならないが、成果を生み出す環境、成果をそしゃくして味わう能力、それをフィードバックして次につなげる土壌はグローバルであってもなくても良い。否、これまでは国民国家的、民族国家的枠組がこうした土壌の単位であったし、そのような枠組がスポンサーでもある限り逆にますます国家間競争的になってくるだろう。グローバリゼーションで競争の波にさらされているのは、科学的製品ではなくて、科学的製品を生み出す環境と味わう風土なのである。より良い環境を提供維持できる国が、世界から頭脳や科学的成果を収奪し、科学的製品とそこからもたらされる利益を独占的に享受することができる。知的所有権を振り回し、特許侵害や著作権侵害で攻撃することもできる。

しかるに、これまで大学や研究機関の改革改造と称してよく議論されていた話題は、科学的製品の競争力ではあったかも知れないが、科学的製品を生み出す環境の競争力では無かった。米国でそれなりの理工系の大学院生をやると研究費等で雇用されるので授業料+食う寝るに困らん程度の給料がもらえるが、日本では親のスネをかじるか借金を作るかしなければならない。これでは世界の若い頭脳をあつめて搾取することは言うに及ばず、国内のしかるべき頭脳を他産業から獲得することも難しい。価格破壊の進行にともなって親の収入も減少するから、スネに頼った大学院生ボランティア(?)の維持も早晚難しくなるだろう。表裏の関係にあるのが、研究費でスタッフを雇用することが労働慣行上非常に難しいという問題であり、したがって野心ある若者が研究グループを率いてプロジェクトを展開する風景など大学ではなかなか見られない。世界に冠たる研究グループでなければCOEとなってPDをもつこともできない。米国じゃあCOEではあり得ない普通の研究グループ(失礼かな?)だってPDの何人かは雇用できる。最初から世界に冠たることができるなら誰も苦勞しないが、新しい芽が世界に冠たるはずはこれまた定義によってありえないから、筋道のついた成果のする仕事にしか投資されていないことになる。

世界の優秀な頭脳を集めようとするならば、しゃべってる人も聞いている人もわけのわからん英語の授業や研究発表会を行うんじゃないくて(英語が問題であるだけなら最初から優秀な人は英米へ行く)、潤沢で良質な教育環境、研究環境の提供を最優先国策にするべきではないのか。日本語英語の言語障壁があるからこそ、むしろ、日本で仕事する人にはTOEICと同様の高度な実務日本語試験を義務づけるべきだろう。それを頑張っても日本に来て働きたくなるような潤沢で良質なインフラストラクチャーを用意するのでなければ、科学的成果を生み出す土壌の国際競争において勝ち目は無い。定義によって優秀な人達を集めたのであるから日本語やってもらうぐらいナンボのものでもなかろう。現状の改革は、これまでとまったく同様の、みんなが苦勞する路線をひたすら進んでいるように見える。学会の運営は言うにおよばず、大学の運営もコストゼロの労働奉仕型村社会手弁当システムのままでは、牧歌的でいいけれどちょっとね。

林 祥介(北海道大学理学研究科地球惑星科学専攻)